＝資料紹介＝

大日本帝国陸海軍国語教科書総覧稿

――陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校編――

小松靖彦

はしがき

本稿は、大日本帝国陸海軍が軍隊教育に用いた国語教科書の内容一覧を示すことを企図したものである。文部省とは独立して行われた軍隊教育における「国語」教育は、近代日本の中等教育の特徴をより拡大して先鋭的に示したものとして注目される。軍隊教育に関する先行研究としては、福地重孝『軍国日本の形成――士族意識の展開とその終末』（特に「八　教育と軍国主義」。春秋社、一九五九）、高野邦夫『軍隊教育と国民教育――帝国陸海軍軍学校の研究――』（つなん出版、二〇一〇）などがある。しかし、「国語」教育に特化しての研究、また『萬葉集』を始めとする古典受容の観点からの研究はこれからの課題となっている。

筆者は以前、陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の「国語」教育における『萬葉集』の受容について、「陸軍教育における『萬葉集』――陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の「国語教程」と学習資料から〈戦争と萬葉集〉」（『緑岡詞林』第40号、二〇一六・三）の論をまとめた。その基礎資料として、陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の教科書「国語教程」（『国文教程』『国語教程』『国漢文教程』）を調査した。これまで「国語教程」については、福地が昭和十三年（一九三八）一月・九月改訂の『昭和十三年印刷　国語教程　陸軍幼年学校用』の目次一覧を紹介している（二二七～二二九頁）。福地はこの「国語教程」に代表される「国語」教材を、社会的関心や国際的関心から隔てられたところで精神陶冶をめざす、非近代的で時代錯誤なものと批判した。

しかし、『萬葉集』の受容のありようや、陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の文官教官（多くは帝国大学の国語学・国文学

の学科出身）の意図を検討するならば、戦後の視点に立って「軍国主義」形成のための「非近代的」教育と批判するだけでは捉えきれない複雑な問題が存在している。

例えば、『萬葉集』の採択状況は、天皇への忠誠心を示す歌を核にしながらも、やがてアララギ派が高く評価する「写実」に優れた歌を取り上げるようになり、さらには「国語教程」編者の独自の判断で死別・生別に関わる歌を加えるに至っている。

「国語教程」の教材は、確かに前近代・近代の戦闘における武士・軍人の天皇への忠誠を主題とする文章を中心に、道徳的・精神修養的なものをベースとしている。しかし、それに止まらず、『土佐日記』を始めとする紀行文、幸田露伴『五重塔』、国木田独歩『武蔵野』、夏目漱石『倫敦塔』などの近代文学作品、さらに戦争の本質を抉り出すような戦場詠を詠んだ渡辺直己の短歌までも収録しているのである。

編纂に関わった文官教官たちは、軍人教育の範囲内で、文学によって豊かな感情を育むことも志向していた。しかし、その「豊かな感情」は、「国語教程」のコンテクストの中では、文官教官の意識や意図と異なり、「忠」「孝」「誠」などの道徳的・教条的なものに読み換えられる性質を持っていた。そして、この性質は、軍隊教育に限らず、戦前の『萬葉集』の受容一般にも通ずるものであった（詳細は筆者の論文を参照されたい。https://www.agulin.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/20551/?lang=0&mode=0&opkey=R1608889142315 79&idx=2&chk_schema=1000&cate_schema=1000&codeno=1&fc_val=）。

軍隊教育における「国語」教育のコンテクストの解明と、「国語」教育史、また教科書における和歌・軍記などの古典文学や近代文学・思想の受容研究に新たな材料を提供するために、大日本帝国陸海軍の国語教科書の内容を集成し提示することとした。今回まず、筆者の論文の基礎資料となった、陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の「国語教程」の内容一覧を示す。タイトルに「稿」の文字を加えたのは、調査に不完全なところを残しているためである。今後さらに精査したい。なお、本誌の次号以降に海軍士官学校などの国語教科書の内容一覧も報告する予定である。

「国語教程」の調査の機会を賜った防衛省防衛研究所、靖國神社偕行文庫に篤く御礼申し上げる。

凡例

・「国語教程」の書名は、表紙の題箋による。
・篇・巻が四角で囲んであるものは、調査済みのものである（各々、一冊の書籍である）。
・資料として架蔵本と諸機関（防衛省防衛研究所、靖國神社偕行文庫）所蔵本（巻の後に「❖」を付したもの）を使用した。
・篇・巻のあとに（　）で奥付の発行年月日を記した。［　］で囲んである場合は奥付を当初から欠き、題簽・扉による推定である。

・「＊」を付した篇・巻は二〇一六年時点で現存が確認できていないものである。現存状況・所蔵情報の詳細は、「はしがき」に挙げた筆者の論文「陸軍教育における『萬葉集』―陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校の「国語教程」と学習資料から〈戦争と萬葉集〉―」の**資料5**・「国語教程」の所蔵情報参照。

・架蔵本については本文の章題、著者名または作品名を採取し、これに脱落・誤植がある場合、目次で訂正した。

・諸機関所蔵本については、目次をベースとした。本文から補った情報もある（例えば、「国語教程巻一註釈」）。目次に脱落・誤植がある場合、本文の章題で訂正した。

・各章末尾に「（　　）」で出典が示されている場合には、著者名を記す箇所、または著者名の後に小字で記した。ただし、章題と同じ場合には省略した。なお、諸機関所蔵本については、調査の際に記録漏れがあったため、これを記していない冊がある。

・章題、著者名・作品名、出典の表記は、原則として新字体に改めた。

・「※」は筆者の調査による注記である。和歌の作者別歌数については、何も記していない場合は一首である。『萬葉集』の作者名の表記は原文に拠らず、現代の研究における表記に修正した。また、『萬葉集』については、同じ題詞の歌毎に歌数を記した。作者名に傍線が引いてある場合は、長歌単独、または長歌と反歌の組み合わせであることを示す。

a　陸軍地方幼年学校・陸軍中央幼年学校予科・東京陸軍幼年学校・陸軍幼年学校〔教育課程三年〕

【明治三十年（一八九七）七月編纂】

『明治三十年編纂 **国文教程　陸軍地方幼年学校用**』

第一篇（一八九七年）

第一	国語国文	梧陰 井上毅	梧陰存稿
第二	風土人情	蒿斎 伴林光平	思出草
第三	国体	三島通庸	国の姿
第四	立志	益軒 貝原篤信	大和俗訓
第五	学問の要	蒿斎 伴林光平	思出草
第六	五教	鷹山 上杉治憲	羽陽叢書
第七	毀誉	益軒 貝原篤信	大和俗訓
第八	報国の赤心	近藤真琴	勅諭衍義
第九	松平信綱の終焉	作者未詳	両窓閑話
第十	真勇	近藤真琴	勅諭衍義
第十一	豪将琵琶を聞きて泣く	鳩巣 室直清	駿台雑話
第十二	鳥居勝商	作者未詳	松廬雑纂
第十三	長者に対する礼	益軒 貝原篤信	大和俗訓
第十四	兄弟	久米幹文	道乃栞
第十五	徳川家光の友愛	白石 新井君美	藩翰譜
第十六	朋友	益軒 貝原篤信	大和俗訓
第十七	君子の交	艮斎 安積信	艮斎閒話

第十八　一得一失
第十九　福島の三家老
第二十　自警
第二十一　人は識見を要す
第二十二　小早川隆景
第二十三　太閤の明智
第二十四　智
第二十五　蟻
第二十六　蜂
第二十七　蘭学の始
第二十八　南洋よりの書簡
第二十九　忍耐
第三十　肝癪もち
第三十一　寸陰惜むべし
第三十二　身を愛すべし
第三十三　雪中の旅行
第三十四　氷上の往来
第三十五　書は心画なり
第三十六　絵を視て悪心を改む
第三十七　寓言
第三十八　少年の敏鈍
第三十九　曾我兄弟と大石主税と
第四十　戦争の説

梅園 三浦安貞　梅園叢書
作者未詳　岩淵夜話
野々口隆正　うた日記
東海 篠崎維章　とはずがたり
白石 新井君美　藩翰譜
常山 湯浅元禎　常山紀談
益軒 貝原篤信　五常訓
作者未詳　博物叢説
作者未詳　博物叢説
杉田玄伯（ママ）
田口卯吉
那珂通高　洋々社談
茶山 菅普師（ママ）　筆のすさび
益軒 貝原篤信　童子訓
益軒 貝原篤信　養生訓
南蹊 橘春暉　東遊記
鈴木牧之　北越雪譜
益軒 貝原篤信　童子訓
堀秀成　琴舎文集
司馬江漢　春波楼筆記
敬宇 中村正直　立志編
堀秀成　琴舎文集
小島好問　兵事概説

第四十一　川中島の合戦
第四十二　小宮山内膳
第四十三　生田の桜
第四十四　一の谷の躑躅
第四十五　長良川の鵜飼
第四十六　森蘭丸
第四十七　老僧の篤実
第四十八　板倉重宗の公平
第四十九　檄文
第五十　訓諭

第二篇（一八九七年）

第一　教育
第二　名和長年の幼時
第三　孝順父母
第四　忠信
第五　母作非為
第六　物知顔する人
第七　過を改むべし
第八　佐藤一斎に与ふる書
第九　君臣の関係
第十　聖秀が義烈
第十一　土屋兄弟
第十二　細川幽斎

常山 湯浅元禎　常山紀談
鳩巣 室直清　駿台雑話
作者未詳　摂津名所図会
作者未詳　摂津名所図会
三浦千春　美濃奇観
作者未詳　本朝伝記
室直清　駿台雑話
鳩巣 室直清　六諭衍義附録
山縣有朋
大山巌

梅園 三浦安貞　梅園叢書
淇園 柳沢公美　雲萍雑誌
鳩巣 室直清　六諭衍義（節略）
艮斎 安積信　艮斎閑話
鳩巣 室直清　六諭衍義
畑鶴山　四方の海
湯斎 中村之欽　姫鏡
徳川斉昭　維新史料
梧陰 井上毅　梧陰存稿
鳩巣 室直清　駿台雑話
白石 新井君美　藩翰譜（節略）
白石 新井君美　藩翰譜

第十三　鈴木久三郎の諷諫
第十四　本多重次の剛邁
第十五　安藤直次の予言
第十六　倹徳
第十七　仁徳天皇の御製
第十八　後三条天皇の御膳
第十九　井伊直政の譚
第二十　用財
第二十一　徳川家康の厩
第二十二　山内一豊の馬
第二十三　阿部忠秋の居
第二十四　持満の説
第二十五　源義仲
第二十六　源実朝の末路
第二十七　将校の箴
第二十八　大将の十過
第二十九　伊達政宗の機略
第三十　軍紀
第三十一　人心の結縄
第三十二　勇怯
第三十二　朝鮮南大門の戦
第三十三　奉答文（節略）
第三十五　平壌の戦記
成瀬司直　徳川実記（ママ）
白石 新井君美　藩翰譜
常山 湯浅元禎　常山紀談
近藤真琴　勅論衍義
佐藤元萇　感詠一貫
棚谷元善　三徳事実
原義　三省録
益軒 貝原篤信　家道訓
常山 湯浅元禎　武将感状記
白石 新井君美　藩翰譜
作者未詳　本朝伝記録
鷹山 上杉治憲　羽陽叢書
白石 新井君美　読史余論
新井君美　読史余論
素行 山鹿高祐　武教全書
同上
白石 新井君美　藩翰譜
小島好問　兵事概説
甫庵 小瀬道喜　太閤記八物語
辻一貫　皇朝兵史（節略）
常山 湯浅元禎　常山紀談
山縣有朋
伯爵 野津道貫
第三十六　支那　内田正雄　輿地誌略
第三十七　支那史を読む　梧陰 井上毅　梧陰存稿
第三十八　暹羅に於ける山田長正　棚谷元善　三徳事実
第三十九　台湾に於ける浜田弥兵衛　元田永孚　幼学綱領
第四十　羅馬に於ける支倉六右衛門　近藤芳樹　陸路の記
第四十一　我が国の勇武　藤田彪　常陸帯
第三編＊

【明治三十四年（一九〇一）六月編纂】

【明治三十五年（一九〇二）六月改訂】

『明治三十九年印刷 **国語教程** 陸軍中央幼年学校予科及陸軍地方幼年学校用』

巻一＊　巻二＊

巻三❖（一九〇六年七月二十一日発行）

第一篇

第一　帝国軍隊ノ将校ニ告グル檄　山縣有朋
第二　大和島根 短歌　村田春海
第三　丁汝昌を論ず　加藤弘之
第四　春風手折りし枝を慕ふ　室直清
第五　譬喩五則
第六　ナポレオン帝の戦勝演説　新体文章軌範　成島弘
第七　白石先生ヲ祭ル文
第八　嵐 短歌　賀茂真淵

第九　陸軍士官学校参観の記　中村教一
第十　分陰を惜むべし短歌　本居宣長
第十一　譬喩五則
第十二　殊勝なる武者振　室直清
第十三　憲法発布ノ詔

第二篇

第一　支那史を読む　井上毅
第二　啓書記ノ画ニ題ス　国華
第三　佐野了伯　室直清
第四　雪の夕暮短歌　藤原定家
第五　武士の嗜　新井君美
第六　譬喩五則
第七　雅量　徳富猪一郎
第八　刀剣　新井君美
第九　勿来の関短歌　源義家
第十　武家政治は藤原氏の専権に基づく　新井君美
第十一　譬喩五則
第十二　村上義光父子　太平記
第十三　忠貞短歌　源実朝
第十四　楠正成ノ忠勇　太平記
国語教程巻三註釈

【明治四十年（一九〇七）六月増訂（「改訂」とも）】

【明治四十二年（一九〇九）六月改訂】

『大正四年印刷 国語教程 陸軍中央幼年学校予科及陸軍地方幼年学校用』

巻一＊　巻二＊

巻三❖（一九一五年八月三十一日発行）

第一篇

第一　大日本帝国憲法の由来一
第二　大日本帝国憲法の由来二
第三　陳志短歌
第四　帝国軍隊ノ将校ニ告グル檄一　山縣有朋
第五　帝国軍隊ノ将校ニ告グル檄二
第六　仁短歌
第七　丁汝昌を論ず一　加藤弘之
第八　丁汝昌を論ず二
第九　陸軍士官学校参観の記一　中村教一
第十　陸軍士官学校参観の記二
第十一　譬喩五則
第十二　頼士剛ノ東遊スルヲ送ル　森田益
第十三　母子の真情短歌　在原業平
第十四　文字及ビ読方
第十五　馬
第十六　金ヶ崎懐古一　菊地清
第十七　金ヶ崎懐古二
第十八　俗諺五則

第十九　西郷隆盛に与ふる書一　山縣有朋
第二十　西郷隆盛に与ふる書二
第二十一　九重の山水一　大橋又太郎
第二十二　九重の山水二
第二十三　富士山短歌　村田春海
第二十四　ナポレオン帝の戦勝演説
第二十五　譬喩五則
第二十六　門生に諭す一　室直清
第二十七　門生に諭す二
第二十八　皇国の旗新体詩　中邨秋香
第二十九　事務の才幹一　島田三郎
第三十　事務の才幹二
第三十一　事務の才幹三
第三十二　出征の衛生官に与ふる書　石黒忠悳
第三十三　歳暮所感短歌　春道列樹

第二篇

第一　寒稽古一　中川霞城
第二　寒稽古二
第三　岩倉公の逸事一　井上毅
第四　岩倉公の逸事二
第五　岩倉公の逸事三
第六　大和島根短歌　村田春海
第七　橘中佐戦死の状況を遺族に報ずる文　佐藤小次郎
第八　良友一　中村正直
第九　良友二
第十　森先生伝の序　高崎正風
第十一　佐野了伯　室直清
第十二　譬喩五則
第十三　武家政治の因由　新井君美
第十四　白石先生ヲ祭ル文　成島弘
第十五　嵐短歌　賀茂真淵
第十六　征人の涙　徳富猪一郎
第十七　明治三十七八年陸軍戦役記念日設定趣意書
第十八　感状
第十九　内閣改制ノ奏議　三条実美
第二十　勿来の関短歌　源義家
第二十一　平泉　松尾芭蕉
第二十二　ヒマラヤ紀行一
第二十三　ヒマラヤ紀行二
第二十四　尺牘に関する意見一　作者未詳
第二十五　尺牘に関する意見二　作者未詳
第二十六　旅順口港外ノ海戦報告一
第二十七　旅順口港外ノ海戦報告二
第二十八　をりにふれてよませ給ひける短歌
第二十九　戦艦薩摩進水式一
第三十　戦艦薩摩進水式二

第三十一　啓書記ノ画ニ題ス
第三十二　支那史を読む一　井上毅
第三十三　支那史を読む二
第三十四　譬喩五則
第三十五　松ノ下露
第三十六　村上義光父子一
第三十七　村上義光父子二
第三十八　蘇武新体詩　坪内雄蔵
第三十九　楠木正成ノ忠勇一
第四十　楠木正成ノ忠勇二
第四十一　忠貞短歌　源実朝
第四十二　楠氏ノ論　頼襄
第四十三　高山登攀の壮観及び利益　三好学
第四十四　望不盡山歌長歌　山部赤人

国語教程巻三註釈

『大正五年印刷　国語教程　陸軍中央幼年学校予科及陸軍地方幼年学校用』

巻一＊

巻二❖（一九一六年七月三十日発行）

第一篇

第一　学問の要は活用にあり　福沢諭吉
第二　作文の心得　木村架空
第三　譬喩五則
第四　日光山ニ遊ブ記一　佐藤坦
第五　日光山ニ遊ブ記二
第六　覚悟短歌　太田持資
第七　諭言五則　那珂通高
第八　法律及び立法一　大町芳衛
第九　法律及び立法二
第十　戦地より某郡長に与ふる書一　佐藤正
第十一　戦地より某郡長に与ふる書二
第十二　朋友短歌　松平定信
第十三　忠勇なる園丁一
第十四　忠勇なる園丁二　（国文読本）
第十五　香港　（松窓夜話）
第十六　譬喩五則
第十七　善く働き善く遊ぶべき事一　大鳥圭介
第十八　善く働き善く遊ぶべき事二
第十九　天つ風短歌　平野国臣
第二十　桶狭間ノ戦一　頼襄
第二十一　桶狭間ノ戦二
第二十二　含蓄ある詞遣ひ　（ななしぐさ）
第二十三　独逸留学中の所感　日高真実
第二十四　浜田弥兵衛ノ伝一　斎藤正謙
第二十五　浜田弥兵衛ノ伝二
第二十六　大石良雄一　青山延光

第二十七　大石良雄二
第二十八　歳寒知ニ松柏一ヲ短歌　読人しらず
第二十九　海戦ノ経過ヲ奉告スル表一　東郷平八郎
第三十　海戦ノ経過ヲ奉告スル表二
第三十一　国旗と軍旗　（新体国語教本）

第二篇

第一　国体の基礎　池辺義象
第二　本朝兵器沿革志ノ序　田中参
第三　死は鴻毛よりも軽し短歌　宗良親王
第四　清国ノ風俗一　黒田清隆
第五　清国ノ風俗二
第六　清国ノ風俗三
第七　譬喩五則
第八　徳川時代ノ武事一　佐藤誠実
第九　徳川時代ノ武事二
第十　日の本短歌　後京極良経
第十一　遼東の月一　小笠原長生
第十二　遼東の月二
第十三　譬喩五則
第十四　修辞学一
第十五　修辞学二
第十六　修辞学三
第十七　修辞学四
第十八　忍耐短歌　伴資芳
第十九　国語と愛国心一　上田萬年
第二十　国語と愛国心二
第二十一　国語と愛国心三
第二十二　大和言の葉短歌
第二十三　桜　村田春海
第二十四　奈良の旧都一　前田曙山
第二十五　奈良の旧都二
第二十六　春の曙今様　（新体国語教本）
第二十七　埃及の古蹟一　頼襄
第二十八　埃及の古蹟二
第二十九　埃及の古蹟三　（国文読本）
第三十　皇室に関する敬語一
第三十一　皇室に関する敬語二
第三十二　皇室に関する敬語三
第三十三　譬喩五則
第三十四　振天府拝観ノ記一
第三十五　振天府拝観ノ記二
第三十六　振天府拝観ノ記三
第三十七　振天府拝観ノ記四
第三十八　短慮不レ成レ功ヲ短歌　太田持資
第三十九　義人遺草ノ後ニ書ス　佐々木重之
第四十　書牘一　徳富猪一郎

第四十一　書牘二
第四十二　書牘三
第四十三　書牘四
第四十四　殊勝なる武者振　室直清
第四十五　聖駕ノ凱旋ヲ賀シ奉ル表　近衛篤麻呂
国語教程巻二註釈
巻三＊

【大正十一年（一九二二）一月改訂】

【大正十三年（一九二四・一月（「六月」とも）改訂】
『大正十五年印刷　国語教程　陸軍幼年学校用』
巻一＊　巻二＊
巻三❖（一九二六年十月二十五日発行）
第一　大日本帝国憲法の由来　芳賀矢一
第二　上代の国民　藤岡作太郎
第三　吉野山　室直清
第四　和歌の感興の益あり　（中等国文教科書）
第五　文学及び読方
第六　欧洲戦役に就きて
第七　元気の持続（口語）　大隈重信
第八　源平の三烈士　室直清
第九　常陸帯の序　藤田彪
第十　感状　成島弘
第十一　白石先生ヲ祭ル文　遅塚麗水
第十二　鳴門　芳賀矢一
第十三　文学と気品（口語）　杉浦重剛
第十四　成功期の標準　徳富猪一郎
第十五　乃木大将の殉死
第十六　俳句
第十七　知己難　徳富猪一郎
第十八　西郷隆盛に与ふる書　山縣有朋
第十九　城山の嵐　勝安房
第二十　史筆の公正　島田三郎
第二十一　我が国民の直覚力（口語）　元田作之進
第二十二　金ヶ崎懐古　菊池清
第二十三　譬喩
第二十四　岩倉公の逸事　井上毅
第二十五　公同生存　穂積八束
第二十六　戦艦薩摩進水式
第二十七　啓書記の画に題す　（国華）
第二十八　武蔵野（口語）　国木田哲夫
第二十九　門生に諭す　室直清
第三十　出征の衛生官に与ふる書　石黒忠悳
第三十一　物の始　幸田露伴
第三十二　川柳点　矢野文雄

第三十三　寒稽古　中川霞城
第三十四　松の下露　（太平記）
第三十五　熊野落　（太平記）
第三十六　村上義光父子　（太平記）
第三十七　世界の四聖　高山林次郎
第三十八　孔子研究の後に書す　桑木厳翼
第三十九　月雪花（口語）　芳賀矢一
第四十　楠木正成の忠勇
第四十一　楠氏の論　頼襄
第四十二　千早城址　塩井正男
第四十三　忠君愛国精神の積極的発動　徳富猪一郎
第四十四　山部宿禰赤人望不盡山歌一首並短歌
国語教程巻三註釈

『昭和七年印刷　国語教程　陸軍幼年学校用』
巻一　❖（「昭和四年三月二十五日発行」）

第一　東西武士道ノ比較（口語）
第二　任務（口語）
第三　真田大助　柴野邦彦
第四　春郊　大町桂月
第五　勿来関　熊田葦城
第六　漢字ノ意義
第七　俚諺　大西祝
第八　偉人　大町桂月
第九　乃木大将の少時　横田健堂
第十　太田持資　安積信
第十一　明治天皇御製
第十二　旅順口閉塞隊
第十三　我が戦捷の真因　鳳秀太郎
第十四　真の勇気　坪内雄蔵
第十五　北白川の月影　西村時彦
第十六　詩的農園　菊池幽芳
第十七　印度洋上の晩景
第十八　読物を問はれたるに答ふ　大町桂月
第十九　十八楼の記　松尾芭蕉
第二十　機上偵察
第二十一　俗諺
第二十二　山の美　志賀重昂
第二十三　水の力新体詩　幸田露伴
第二十四　比叡山上の眺望　杉村広太郎
第二十五　懐古　小室屈山
第二十六　剛勇　大槻清崇
第二十七　軍旗拝受記念日祝辞　渡辺湊
第二十八　皇室　大町桂月
第二十九　有栖川の流れ
第三十　小中村文学博士ノ古稀ヲ祝スル詞　辻新次

第三十一　日記　三上参次
第三十二　四季の和歌
第三十三　人の宝　那珂通高
第三十四　壮烈（口語）
第三十五　友人に忠告する文
第三十六　智慧伊豆　大町桂月
第三十七　譬喩
第三十八　殊勝なる武者振
第三十九　時間の厳守　室直清
第四十　名将ノ慈愛　安積信
第四十一　熱情を抑制すべき説　井上哲次郎
第四十二　帰省の模様を知らする文　竹越与三郎
第四十三　植物の景観と気象との関係　三好学
第四十四　旅順戦死者ノ霊ヲ祭ル文　乃木希典
第四十五　雪（口語）
第四十六　奉天の大会戦　新保磐次
第四十七　奉天会戦ノ後賜ハリタル勅語
第四十八　古榴弾ノ記　成島弘
第四十九　鵯越
第五十　神社
国語教程巻一註釈
巻二＊　巻三＊

【昭和八年（一九三三）三月改訂】
『昭和八年改訂 国語教程 陸軍幼年学校用』
巻一 ❖（一九三三年三月三十一日発行）

前篇

第一　東西武士道ノ比較（口語）　徳富蘇峰
第二　国史に返れ（口語）　大町桂月
第三　春郊　熊田韋城
第四　勿来関　柴野栗山
第五　真田大助　芳賀矢一
第六　名将の文事　萩野由之
第七　学徒に示す　貝原益軒
第八　立志　大町桂月
第九　史伝を読め（候文）
第十　明治天皇御製　五十嵐力
第十一　明治神宮　坪内逍遥
第十二　真の勇気
第十三　廟行鎮攻撃の三勇士（口語）　徳富蘇峰
第十四　北白川の月影　西村天囚
第十五　天徳寺了伯　湯浅常山
第十六　壮烈
第十七　人の宝　那珂通高
第十八　死して惜まるる人となれ　嘉納治五郎
第十九　懐古　小室屈山

第二十　譬喩
第二十一　山の美　志賀重昂
第二十二　水の力　幸田露伴
中篇
第二十三　乃木将軍の少時　横山健堂
第二十四　名将ノ慈愛　安積艮斎
第二十五　旅行の楽　貝原益軒
第二十六　松島に遊ぶ　正岡子規
第二十七　比叡山上の眺望　杉村楚人冠
第二十八　漸進主義（口語）　八波則吉
第二十九　智慧伊豆　大町桂月
第三十　軍旗拝受記念式祝辞　渡辺湊
第三十一　皇室　大町桂月
第三十二　有栖川の流
第三十三　日記　三上参次
第三十四　国語と愛国心　上田萬年
第三十五　是是非非　大谷光瑞
第三十六　誠　三浦梅園
第三十七　友人に忠告す（候文）　徳富蘆花
第三十八　晩秋初冬
第三十九　四季の和歌
第四十　旅順口閉塞隊
第四十一　旅順戦病死者ノ霊ヲ祭ル文　乃木希典
第四十二　惜陰　貝原益軒
後篇
第四十三　雪
第四十四　滋賀の山越　村井弦斎
第四十五　殊勝なる武者振　室鳩巣
第四十六　空中戦（口語）
第四十七　道話　二宮尊徳
第四十八　帰省の模様を知らす（候文）　竹越与三郎
第四十九　奉天の大会戦　新保磐次
第五十　奉天会戦ノ後賜ハリタル勅語
第五十一　我が戦捷の真因　鳳秀太郎
第五十二　鵜越　源平盛衰記
第五十三　神社
国語教程巻一註釈
巻二 ❖（一九三三年三月三十一日発行）
前篇
第一　尊王論の起因　落合直文
第二　桜　前田曙山
第三　奈良の旧都　藤岡東圃
第四　進学　室鳩巣
第五　読書の選択　佐々政一
第六　俳句
第七　南洲遺訓　西郷南洲

第八　西郷隆盛に与ふる書　山縣有朋
第九　橘中佐戦死の状況を遺族に報ず（候文）　佐藤小次郎
第十　胆力を養へ（口語）　嘉納治五郎
第十一　元寇　三宅雪嶺
第十二　人臣の道　北畠親房
第十三　白川大将ヲ弔フ　荒木貞夫
第十四　皇室に関する敬語
第十五　振天府拝観ノ記
第十六　赤十字社
第十七　船の旅　遅塚麗水
第十八　海の和歌
（※山部赤人・凡河内躬恒・徳大寺実定・賀茂真淵・小沢蘆庵・源実朝）

中篇

第十九　乃木将軍　森鷗外
第二十　旅順の追懐　藤岡東圃
第二十一　聯合艦隊解散告別ノ辞　東郷平八郎
第二十二　武士道　山路愛山
第二十三　忠臣義士の本意　山鹿素行
第二十四　楠木正成の忠勇　太平記
第二十五　千早城址　塩井雨江
第二十六　白峰の陵　上田秋成
第二十七　九重の山水　大橋乙羽
第二十八　明治節（口語）　徳富蘇峰
第二十九　伊藤公を誄す　井上馨
第三十　武蔵野　国木田独歩
第三十一　宇津木静区　中村秋香
第三十二　志士の和歌　福本日南
第三十三　富士川の対陣　平家物語

後篇

第三十四　皇軍の歌　（徳富猪一郎・佐佐木信綱作歌）
第三十五　国旗と軍旗　藤岡東圃
第三十六　徳川時代ノ武事　佐藤誠実
第三十七　ハンニバル　矢野龍渓
第三十八　心育と体育　坪内逍遥
第三十九　遼東の月　小笠原長生
第四十　月雪花　芳賀矢一
第四十一　俗諺
第四十二　源平の三烈士　室鳩巣
第四十三　扇の的　平家物語
第四十四　聖駕ノ凱旋ヲ賀シ奉ル表　近衛篤麿
国語教程巻二註釈

巻三 ❖（一九三三年三月三十一日発行）

前篇

第一　大日本帝国憲法の由来
第二　忠君愛国精神の積極的発動　徳富蘇峰
第三　上代の国民　芳賀矢一

第四　吉野山　藤岡東圃
第五　和歌に感興の益あり　室鳩巣
第六　常陸帯の序　藤田東湖
第七　感状
第八　譬喩
第九　白河殿の軍議　保元物語
第十　浮島ヶ原の対面　義経記
第十一　平家の末路　源平盛衰記
第十二　平家雑感　高山樗牛
第十三　落花の雪　太平記
第十四　文章と気品（口語）　芳賀矢一
第十五　史筆の公正　島田三郎
第十六　世界の四聖　高山樗牛
第十七　俳句
第十八　鳴門　遅塚麗水

中篇

第十九　乃木大将の殉死　徳富蘇峰
第二十　永遠の生命（口語）　瓦理（ママ）章三郎
第二十一　松の下露　太平記
第二十二　熊野落　太平記
第二十三　村上義光父子　太平記
第二十四　東路の旅　東関紀行
第二十五　松島より平泉へ　松尾芭蕉
第二十六　金ヶ崎懐古　菊地幽芳
第二十七　大礼寿詞　田中義一
第二十八　知己難　徳富蘇峰
第二十九　修学の今昔　笹川臨風
第三十　成功期の標準　杉浦重剛
第三十一　我が国の絵画　藤岡東圃
第三十二　人生の快事　三宅雪嶺
第三十三　公同生存　穂積八束

後篇

第三十四　物の初　幸田露伴
第三十五　川柳点　矢野龍渓
第三十六　寒稽古　中川霞城
第三十七　光頼卿の参内　平治物語
第三十八　文化の余弊　大町桂月
第三十九　菅公　高山樗牛
第三十九　梅　藤岡東圃
第四十一　狭き国は広く峻しき国は平けく（口語）　五十嵐力
第四十二　萬葉集の歌
（※長歌の一部、大伴家持。長歌・反歌、山部赤人）

国語教程巻三註釈

【昭和十三年一月改訂（巻一・巻二）、九月改訂（巻三）】

『昭和十三年印刷 国語教程 陸軍幼年学校用』

巻一 ❖（一九三八年一月六日発行）

前篇

第一　東西武士道ノ比較（口語）　徳富蘇峰
第二　国史に返れ（口語）　大町桂月
第三　春郊　熊田韋城（日本史蹟）
第四　勿来関　柴野栗山
第五　花の若武者　芳賀矢一
第六　名将の文事　萩野由之
第七　学徒に示す　大町桂月
第八　史伝を読め（候文）
第九　明治天皇御製（※一〇首）
第十　明治神宮　五十嵐力
第十一　真の勇気　坪内逍遥
第十二　廟行鎮の三勇士（口語）　徳富蘇峰（東京日日新聞）
第十三　北白川の月影　西村天因
第十四　天徳寺了伯　湯浅常山（常山紀談）
第十五　壮烈　那珂通高（時局に関する教育資料に拠る）
第十六　人の宝　中村正直
第十七　訓話二題
一　否の語（西洋節用論）　二　勤勉と耐久（西国立志編）
第十八　死して惜しまるる人となれ　嘉納治五郎
第十九　懐古　小室屈山
第二十　譬喩　志賀重昂
第二十一　山の美　幸田露伴
第二十二　水の力

中篇

第二十三　乃木大将の少時　横山健堂
第二十四　名将ノ慈愛　安積艮斎
第二十五　松島に遊ぶ　正岡子規（獺祭書屋俳話）
第二十六　比叡山上の眺望　杉村楚人冠
第二十七　漸進主義（口語）　八波則吉（よくぞ男に）
第二十八　智慧伊豆　大町桂月
第二十九　軍旗拝受記念式祝辞　渡辺湊
第三十　皇室　大町桂月
第三十一　有栖川の流（国定読本に拠る）
第三十二　日記　三上参次
第三十三　国語と愛国心　上田萬年（国語のため）
第三十四　是是非非　大谷光瑞（無題録）
第三十五　誠　三浦梅園（梅園叢書）
第三十六　友人に忠告す（候文）
第三十七　晩秋初冬　徳富蘆花（自然と人生）
第三十八　四季の和歌（※八首。素性・源頼実ら）
第三十九　内匠頭の奥津城へ　大町桂月（『戦影』に拠る）
第四十　旅順口閉塞隊
第四十一　旅順戦病死者ノ霊ヲ祭ル文　乃木希典

第四十二　惜陰　貝原益軒（大和俗訓）
後篇
第四十三　雪（国定読本に拠る）
第四十四　滋賀の山越　村井弦斎（近江聖人）
第四十五　空行く雁　曾我物語
第四十六　空中戦（口語）（『剣から鍬へ』の文に拠る）
第四十七　故郷　正岡子規（子規随筆）
第四十八　帰省の模様を知らす（候文）　竹越与三郎
第四十九　奉天の大会戦　新保磐次
第五十　奉天会戦ノ後賜ハリタル勅語
第五十一　我が戦捷の真因　鳳秀太郎
第五十二　鵯越　平家物語
第五十三　神社（明治読本）
国語教程巻一註釈
巻二 ❖（一九三八年一月六日発行）
前篇
第一　我が国体　北畠親房（神皇正統記）
第二　尊王論の起因　落合直文
第三　桜　前田曙山
第四　奈良の旧都　藤岡東圃
第五　読書の選択　佐々政一
第六　進学　室鳩巣（駿台雑話）
第七　わが幼時　新井白石（折焚く柴の記）
第八　俳句　西郷隆盛に与ふる書　山縣有朋
第九　橘中佐戦死の状況を遺族に報ず（候文）　佐藤小次郎
第十　白川大将ヲ弔フ　荒木貞夫
第十一　明治天皇（口語）　徳富蘇峰（国民小訓）
第十二　皇室に関する敬語
第十三　振天府拝観ノ記
第十四　赤十字社
第十五　元寇　三宅雪嶺
第十六　船の旅　遅塚麗水（新入蜀記）
第十七　海の和歌
第十八
中篇
第十九　武士道　山路愛山（愛山文集）
第二十　忠臣義士の本意　山鹿素行（山鹿語類）
第二十一　正行の参内　太平記
第二十二　正成の忠勇　太平記
第二十三　千早城址　塩井雨江
第二十四　旅順の追懐　藤岡東圃
第二十五　聯合艦隊解散式ニ於ケル訓示　東郷平八郎
第二十六　白峰の陵　上田秋成（雨月物語）
第二十七　武蔵野（口語）　国木田独歩
第二十八　九重の山水　大橋乙羽
第二十九　伊藤公を誄す　井上馨

第三十　人臣の道　北畠親房（神皇正統記）
第三十一　宇津木静区　中村秋香
第三十二　志士の和歌　福本日南
第三十三　富士川の対陣　平家物語

後篇

第三十四　皇軍の歌　徳富猪一郎・佐佐木信綱作歌
第三十五　国旗と軍旗　藤岡東圃
第三十六　徳川時代ノ武事　佐藤誠実（日本教育史）
第三十七　ハンニバル　矢野龍渓
第三十八　心育と体育　坪内逍遥
第三十九　遼東の月　小笠原長生
第四十　月雪花（口語）　芳賀矢一
第四十一　俗諺　室鳩巣
第四十二　源平の三烈士　平家物語
第四十三　扇の的
第四十四　聖駕ノ凱旋ヲ賀シ奉ル表　近衛篤麿
国語教程巻二註釈

巻三 ❖（一九三八年十月二十八日発行）

前篇

第一　大日本帝国憲法の由来　芳賀矢一
第二　上代の国民　藤岡東圃
第三　吉野山　村上義光父子
第四　常陸帯の序　太平記
第五　譬喩　藤田東湖
第六　伏木がくれ　源平盛衰記
第七　浮島ヶ原の対面　義経記
第八　平家の末路　源平盛衰記
第九　落花の雪　太平記
第十　文学と気品（口語）　芳賀矢一
第十一　俳句　高山樗牛
第十二　世界の四聖　藤村作
第十三　西郷南洲　松尾芭蕉（奥の細道）
第十四　松島より平泉へ　内藤湖南（燕山楚水）
第十五　万里の長城

中篇

第十六　乃木大将の殉死　徳富蘇峰
第十七　感状　太平記
第十八　松の下露　太平記
第十九　熊野落　太平記
第二十　永遠の生命（口語）　互理章三郎（国民道徳）
第二十一　東路の旅　東関紀行
第二十二　金ヶ崎懐古　菊地幽芳
第二十三　光頼卿の参内　平治物語
第二十四　忠度の都落　平家物語
第二十五

第二十六　和歌に感興の益あり　室鳩巣
第二十七　知己難　徳富蘇峰
第二十八　討入の光景を報ず　榎本其角
第二十九　人生の快時　三宅雪嶺（日本及び日本人）
第三十　文化の余弊　大町桂月（桂月全集）

後篇

第三十一　物の初　幸田露伴
第三十二　川柳点　矢野龍渓
第三十三　寒稽古　中川霞城
第三十四　修学の今昔　笹川臨風
第三十五　和漢朗詠集　大鏡
第三十六　菅公　藤岡東圃（東圃遺稿）
第三十七　梅
第三十八　狭き国は広く峻しき国は平けく（口語）　五十嵐力
第三十九　即位の宣命
第四十　萬葉集の歌
（※長歌の一部、大伴家持。長歌・反歌、山部赤人）

【＊記録を欠くが、昭和十七年（一九四二）に『国漢文教程甲　陸軍幼年学校用』を新たに編纂か】（漢文を教材とする『国漢文教程乙　陸軍幼年学校用』（一九四二年十月一日発行〈巻一〉、十一月五日発行〈巻二〉、十月十五日発行〈巻三〉）が現存）

b　陸軍中央幼年学校・陸軍中央幼年学校本科・陸軍士官学校予科・陸軍予科士官学校〔教育課程二年〕

【明治三十年（一八九七）年七月編纂】

『明治三十年編纂　国文教程　陸軍中央幼年学校用』

巻一❖（一八九七年）

第一　大日本　北畠親房　神皇正統記（節略）
第二　嵯峨天皇の御治世　同　神皇正統記
第三　触るゝ所の益　卜部兼好　徒然草
第四　人の賢愚　同　徒然草
第五　源為朝の大言　作者未詳　保元物語
第六　平重盛の諫言　同　源平盛衰記
第七　宇治河の戦　同　平家物語
第八　笠置山の戦　同　太平記
第九　後醍醐天皇の崩御　北畠親房　神皇正統記
第十　君がため　宗良親王　新葉集
第十一　和歌の話　室直清　駿台雑話
第十二　時頼の節倹　卜部兼好　徒然草
第十三　熊王の発心　松翁　吉野拾遺
第十四　平忠度の都落　作者未詳　平家物語
第十五　大塔宮の十津川落　同　太平記
第十六　義経鵜越の奇襲　同　源平盛衰記
第十七　富士山に登る記　加茂季鷹　富士日記

第十八　花月の遊　松平定信　花月雙紙
第十九　慢心　卜部兼好　徒然草
第二十　誠　三浦安貞　梅園叢書
第二十一　地震　鴨長明　方丈記
第二十二　夏　貝原篤信　楽訓
第二十三　常陸帯の序　藤田彪　常陸帯
第二十四　祭芳宜園大人墓文　村田春海
第二十五　戦時の有様　志賀理斎
第二十六　虚実　山鹿高祐　武教全書
第二十七　心気力　同　武教全書
第二十八　必勝　同　武教全書
第二十九　後醍醐天皇の笠置落　作者未詳　太平記
第三十　都気能雄久志序　岩倉具視　都気能雄久志
第三十一　延元の都改　作者未詳　太平記
第三十二　楠正成兵庫に下る　同　太平記
第三十三　同　伝賛　下河辺長流　文苑玉露
第三十四　楠公論　菅晋師（ママ）　筆のすさび
第三十五　賀名生の皇居　作者未詳　太平記

巻二＊

【明治三十二年（一八九九）八月改訂】
『明治三十二年改訂　国文教程　陸軍中央幼年学校用』

巻一＊

巻二❖（一八九九年）

第一編

第一　臣民の道　北畠親房　神皇正統記
第二　平治の乱　同　神皇正統記
第三　後醍醐天皇の崩御　同　神皇正統記
第四　古戦場　久米幹文　水屋集
第五　月の宴　栄華物語
第六　旧都の月　後徳大寺実定　源平盛衰記
第七　学の喩　伊達千広　家集
第八　百済川成飛騨匠と挑む　源隆国　今昔物語
第九　藤原保昌袴垂を威服す　同　宇治拾遺物語
第十　源義家阿（ママ）陪（ママ）貞任の連歌　橘成季　古今著聞集
第十一　源義光秘曲を授く　同　古今著聞集
第十二　源頼朝鵠を射る　十訓抄
第十三　都築経家の馬術　同
第十四　藤原光顕の剛胆　平治物語
第十五　北条時頼の節倹　卜部兼好　徒然草
第十六　主客の応対　同　徒然草
第十七　心の主　同　徒然草
第十八　懈怠の心　同　徒然草
第十九　万事恃む可からず　同　徒然草

第二編

第一　即位　代始和鈔

第二　天智天皇　水鏡
第三　菅原道真の左遷　大鏡
第四　言志　久米幹文　水之屋（ママ）集
第五　桜を賞づる詞　権田直助　家集
第六　新島守　増鏡
第七　文章論　小中村清矩　陽春廬雑考
第八　芳宜園大人の墓を祭る文　村田春海　琴後集
第九　山　伴資芳　閑田文草
第十　熱海日記　藤原葛満
第十一　温泉に行く人を送る　加藤千蔭
第十二　土佐日記　紀貫之
第十三　大伴　大伴家持　萬葉集
第十四　御楯　今奉部与曾布　萬葉集

【明治三十三年（一九〇〇）八月改訂】

『明治三十三年改訂 国文教程 陸軍中央幼年学校用』

巻一 ❖（一九〇〇年）

第一編

第一　御威徳　作者未詳　萩の戸の月、天地の御栄（鈔録）
第二　抗対運動　池原香穑　美登毛廼数（鈔録）
第三　戦時の有様　志賀忍
第四　武家の嗜　新井君美　藩翰譜
第五　源頼朝の功過　同　読史余論
第六　松の下露　太平記（節略）
第七　大塔宮の十津川落　同
第八　村上父子の忠勇　同
第九　楠正成兵庫に下る　同

第二編

第一　孝明天皇　作者未詳　孝明天皇御遺徳（鈔録）
第二　国を豊かにして俗を敦くす　松平定信　花月草紙
第三　技芸の精神　富士谷御杖　北辺随筆
第四　東路の旅　本居宣長　鈴屋集
第五　武蔵野の紀行　北条氏康　武蔵野紀行
第六　常陸帯の序　藤田彪　常陸帯
第七　友人に答ふる書　同　日用文鑑
第八　花月の遊　松平定信　花月草紙
第九　和歌の話　室直清　駿台雑話
第十　源為朝　保元物語
第十一　平重盛の諫言　源平盛衰記
第十二　宇治川の戦　平家物語
第十三　粟津の露　同
第十四　萬世の名　萬葉集
（※短歌二首。山上憶良・大伴家持）

国文教程巻一註釈

（図）
巻二＊

【明治三十四年（一九〇一）七月改訂】
『明治三十四年改訂 国語教程 陸軍中央幼年学校用』
巻一（〔一九〇一年〕）
第一篇
第一　御威徳
第二　天地の栄　海犬養岡麿　萬葉集
第三　戦時の有様　志賀忍
第四　源頼朝の功過　新井君美　読史余論
第五　接頭語及ビ枕詞
第六　技芸の精神　富士谷御杖　北辺随筆
第七　大塔宮ノ十津川落　太平記
第八　萬世の名　萬葉集
（※沈痾の口吟〈山上憶良〉・追和の歌〈大伴家持〉）
国語教程巻一註釈　第一篇
第二篇
第一　孝明天皇
第二　書牘文ノ沿革
（※衛門督より中納言某に寄する文〈落久保物語〉・源頼朝より弟範頼に寄する文〈東鑑〉）
第三　常陸帯の序　藤田彪　常陸帯
第四　花月の遊　松平定信　花月草紙
第五　平重盛の諫言　源平盛衰記
第六　和歌の話　室直清　駿台雑話
第七　宇治川の戦　平家物語
第八　懐を述ぶる歌　佐久間啓　椎園萬葉集
国語教程巻一註釈　第二篇
（図）（※武具）
巻二❖（〔一九〇一年〕）
第一篇
第一　御即位　藤原兼良　代始和鈔
第二　俊基朝臣の東下　太平記
第三　おどろの下　増鏡
第四　臣民の道　源親房　神皇正統記
第五　懈怠の心　釈兼好　徒然草
第六　源義家阿部貞任の連歌　橘成季　古今著聞集
第七　旧都の月　藤原実定　源平盛衰記
第八　那須宗高の事　平家物語
第九　白河殿の夜討　保元物語
国語教程巻二註釈　第一篇
第二篇
第一　坂上田村麿　水鏡
第二　菅原道真　大鏡
第三　藤原道長の逸事　同

第四　月の宴　栄華物語
第五　百済川成飛騨匠と挑む　今昔物語
第六　土佐日記　紀貫之
第七　古今和歌集序　同　古今和歌集
第八　日本武尊　太安萬侶　古事記
第九　賀二陸奥国出レ金詔書一歌　大伴家持　萬葉集
第十　防人歌　今奉部与曾布　萬葉集
国語教程巻二註釈　第二篇
（図）

【明治三十五年（一九〇二）六月改訂】
『明治三十五年改訂　国語教程　陸軍中央幼年学校用』
巻一（未調査）
巻二（一九〇二年）
第一篇
第一　御即位　藤原兼良　代始和鈔
第二　俊基朝臣ノ東下　太平記
第三　おどろの下　増鏡
第四　臣民の道　源親房　神皇正統記
第五　懈怠の心　釈兼好　徒然草
第六　源義家、阿部貞任の連歌　橘成季　古今著聞集
第七　旧都の月　藤原実定　源平盛衰記
第八　那須宗高の事　平家物語
第九　白河殿の夜討　保元物語
国語教程巻二註釈　第一篇
第二篇
第一　坂上田村麿　水鏡
第二　菅原道真　大鏡
第三　藤原道長の逸事　大鏡
第四　百済ノ川成、飛騨ノ匠と挑む　今昔物語
第五　土佐日記　紀貫之
第六　日本武尊　太安萬侶　古事記
第七　賀二陸奥国出レ金詔書一歌　大伴家持　萬葉集
第八　防人歌　今奉部与曾布　萬葉集
国語教程巻二註釈　第二篇
附録　清涼殿ノ図（大内裏図ニ拠ル）

【大正元年（一九一二）八月改訂】
『大正五年印刷　国語教程　陸軍中央幼年学校本科用』
巻四❖（一九一六年発行（※月日未確認））
第一篇
第一　明治天皇の御威徳　藤岡作太郎
第二　大日本帝国憲法第一、二章
第三　法律と道徳との関係　梅謙次郎
第四　凱旋復命書　大山巌
第五　国民ノ至誠　日清戦史

第六　細川幽斎の歌才　新井君美
第七　和歌の感興　室直清
第八　接頭語及ビ枕詞

第二篇

第一　孝明天皇の御遺徳
第二　新なる説　本居宣長
第三　常陸帯の序　藤田彪
第四　戦時の様　松平定信
第五　臣民の道　源親房
第六　畿内戦跡の三山
第七　楠ノ木正行最後ノ参内　太平記
第八　大塔ノ宮ノ隠レ家　太平記
第九　おどろの下　増鏡
第十　浮島ヶ原の対面　義経記
第十一　懈怠の心　釈ノ兼好
国語教程巻四註釈
（図）

巻五＊

『大正六年印刷 国語教程 陸軍中央幼年学校本科用』
巻四＊
巻五❖（一九一七年七月三十日発行）
第一篇

第一　戦　幸田成行
第二　宇治川の戦　平家物語
第三　平ノ重盛の諫言　源平盛衰記
第四　待賢門の戦　平治物語
第五　源ノ為義の苦衷　保元物語
第六　源ノ為家阿倍（ママ）ノ貞任の連歌　橘ノ成季

第二篇

第一　寿詞　本居豊穎
第二　大中臣ノ鎌足の遺事　今昔物語
第三　阪（ママ）ノ上ノ田村麻呂の恩愛　水鏡
第四　菅原ノ道真の清節　大鏡
第五　海上の月　紀ノ貫之
第六　喩族歌　大伴ノ家持
第七　日本武ノ尊の西征　大（ママ）ノ安萬侶
第八　国民の抱負　大西祝
国語教程巻五註釈
（図）

【昭和三年（一九二八）三月改訂】
『昭和三年印刷 国語教程』
巻一（未調査）
附図巻一（一九二八年）
（図）（※内裏・寝殿造・衣服）

巻二＊

『昭和六年印刷 国語教程』

巻一 ❖（一九三一年）

第一　朝見御儀勅語
第二　明治天皇　（明治天皇御聖徳鈔録）
第三　勿来の関　芳賀矢一（月雪花）
第四　駒とめて　芳賀矢一（月雪花）
第五　熱心論　山路愛山（愛山全集）
第六　陣中日記　正岡子規（子規全集）
第七　乃木大将を弔ふ　大町桂月
第八　現代和歌
（※短歌八首。佐々木信綱・尾上柴舟・与謝野寛・金子薫園・斎藤茂吉・長塚節・島木赤彦・石川啄木）
第九　戦争と国民性　芳賀矢一（筆のまに〳〵）
第十　秋色を観じて人事に及ぶ　三宅雪嶺（想痕）
第十一　倫敦塔　夏目漱石
第十二　日本武士の情　徳富蘇峰
第十三　石田治作　森鷗外（鷗外全集第六巻、うた日記）
第十四　不死鳥　田中王道（王道論集）
第十五　江戸時代の和歌
第十六　清水浜臣がもとへ　村田春海（琴後集）
第十七　初雁を聞く辞　加藤千蔭（うけらが花）
第十八　大柳（※俳句。内藤鳴雪・松尾芭蕉ら）
第十九　みとり日記　小林一茶（一茶全集、父終焉の記）
第二十　雨月物語　上田秋成
仏法僧
第二十一　駿台雑話　室鳩巣
壬子試筆
第二十二　潘翰譜　新井白石
浅野長政
第二十三　増鏡
月草の花
第二十四　太平記
千剣破城軍の事　先帝船上に臨幸の事　金崎城落つる事
第二十五　近古和歌選
山家集　金槐集　新葉集
第二十六　保元物語
白河殿夜撃の事　白河殿攻め落す事
第二十七　平治物語
待賢門の軍　義朝父子青墓に落ち着く事　頼朝遠流に宥めらるゝ事
第二十八　東鑑

範頼へ
第二十九　今昔物語　　松尾芭蕉（風俗文選）
わざくらべ　　袴垂　　横井也有（鶉衣）
第三十　大鏡　　拾扇説
序　当代　菅原道真　藤原道長　　案山子
第三十一　土佐日記　紀貫之　　狂歌と川柳（※四方赤良・一休和尚ら）
（図）（※内裏図など）　　述懐
巻二＊　　本居宣長
『昭和七年印刷 国語教程』　　源氏物語の論　本居宣長
巻一＊　　九仙山　近松門左衛門
巻二❖（二九三二年）　　能　坪内逍遥（劇と文学）
第一　明浄直　五十嵐力（新国文学史）　　八島（謡曲）
第二　日本民族の同化力　深作安文（倫理と国民道徳）　　酢薑（狂言）（狂言記）
第三　五重塔　幸田露伴　　新古今集の和歌（※二二首）
第四　法律と芸術　牧野英一（明星）　　徒然草　兼好法師
第五　山庵雑記　北村透谷（北村透谷全集）　　つれづれなるままに　静かに思へば　世に語り伝ふること　何事も入り立たぬ様したるぞよき　或る人弓射ることを習ふに　さしたることなくて　あるもの子を法師になして
第六　石彫獅子の賦　薄田泣菫（ゆく春）　　北畠親房
第七　日蓮論の一節　高山樗牛　　日月の光
第八　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峰文集）　　藤岡作太郎
第九　戦前戦後　志賀重昂（大役小志）　　祇園精舎の事　殿上の闇討の事　西光切られの事
第十　四季雑吟（※俳句。沼波瓊音・荒木田守武ら）　　教訓の事　競が事　太宰府落の事
第十一　甲子吟行　松尾芭蕉（芭蕉翁文集）　　源平盛衰記

落ち行く人人の歌 附忠度淀より帰り俊成に謁する事　宇治川の戦

第二十八　十訓抄

才能芸術を庶幾ふべきこと　紅葉の錦　鬼の詞　白河の関　弓張月　つぼの石ぶみ

第二十九　古今著聞集

源義家　畠山重忠　綴喜の平太

第三十　古今集の和歌（※一九首）

第三十一　枕の草子　清少納言

春は曙　ころは　正月一日は　憎き物　原は

海は　わたりは　みささぎは　仏は

第三十二　伊勢物語

第三十三　萬葉集の端に記せる詞　賀茂真淵

第三十四　萬葉集鈔

（※短歌二五首〈反歌を含む〉、長歌五首。柿本人麻呂〈二首〉・山部赤人〈二首〉・山上憶良〈二首〉・笠金村・高橋虫麻呂・小野老・聖武天皇・橘諸兄・人麻呂歌集・出典不明・出典不明・遣唐使母・光明皇后・丈部人麻呂・今奉部与曾布・大伴家持〈二首〉・大伴家持〈三首〉・山上憶良〈二首〉・山上憶良〈二首〉・柿本人麻呂〈三首〉）

第三十五　古事記　太安萬侶

天地の初発　天の岩戸　八咫烏　伊吹おろし

第三十六　大祓詞

（図）

【昭和八年（一九三三）三月改訂】

『昭和八年印刷 国語教程』巻一❖（一九三三年）

第一　国語と国民的自覚　藤村作（国語教育論）

第二　明治天皇御製

第三　努力の堆積　幸田露伴（努力論）

第四　読書と時　荒木寅三郎（勧学語）

第五　陣中日記　正岡子規（子規全集）

第六　乃木大将を弔ふ　大町桂月

第七　緋縅の鎧

（※短歌一五首。落合直文・佐佐木信綱・正岡子規・与謝野寛・尾上柴舟・金子薫園・伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦・斎藤茂吉・窪田空穂・石川啄木・若山牧水・釈迢空・木下利玄）

第八　倫敦塔　夏目漱石

第九　水窮山開　徳富蘇峰（蘇峰文選）

第十　石田治作　森鷗外（鷗外全集第六巻、うた日記）

第十一　高原　田部重治（峠と高原）

第十二　国学の意義　岩城準太郎（国文学の諸相）

第十三　江戸時代の和歌（※二〇首。徳川光圀・吉田松陰ら）

第十四　初日影（※江戸時代・近代の俳句。内藤鳴雪・炭太祇ら）

第十五　みとり日記　小林一茶（一茶全集、父終焉の記）

第十六　武芸師範の教訓　瀧沢解（朝夷巡島記巻二）
第十七　一の大事　吉田兼好（徒然草）
第十八　増鏡――月草の花
第十九　太平記
一　千剣破城軍の事　二　金崎城落つる事　三　先帝崩御の事
第二十　近古和歌選
一　山家和歌集（※六首）　二　金槐和歌集（※七首）　三　新葉和歌集（※七首）
第二十一　東鑑――範頼へ　源頼朝
第二十二　平家物語
一　禿童の事　二　御輿振の事　三　競が事　四　経正都落の事　五　太宰府落の事　六　大臣殿誅罰の事
第二十三　源平盛衰記――宇治川の戦
第二十四　保元物語
一　白河殿夜撃の事　二　白河殿攻落す事
第二十五　平治物語
一　待賢門の軍　二　義朝父子青墓に落着く事　三　頼朝遠流に宥めらるゝ事
第二十六　説話三章
一　畠山重忠　二　弓張月　三　袴垂
第二十七　大鏡
一　序　二　当代　三　菅原道真　四　藤原道長
（図）第一～第十二（※皇居図・大内裏図・寝殿造・衣服・武具）

巻二 ❖（一九三三年）

第一　朝見御儀勅語
第二　日本民族の同化力　深作安文（倫理と道徳）
第三　日蓮論の一節　高山樗牛
第四　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峯文集）
第五　金華山より太平洋を望みて　土井晩翠（晩翠詩抄）
第六　軍人道徳の淵源と丈夫道　亘理章三郎（軍人勅諭の御下賜と其史的研究）
第七　鎌倉武士の質素と教養　河野省三（日本精神発達史）
第八　長閑（※江戸時代・近代の俳句。漱石など）
第九　甲子吟行　松尾芭蕉（芭蕉翁文集）
第十　九仙山　近松門左衛門（国姓爺合戦）
第十一　八島（※謡曲）
第十二　長光（※狂言）　（狂言記）
第十三　勅撰集　その一（新古今和歌集）（※一六首）
第十四　神皇正統記――日月の光　北畠親房
第十五　勅撰集　その二（古今和歌集）（※一五首）
第十六　急ぐ事ある折　（枕草子）
第十七　惟喬の皇子　（伊勢物語）
第十八　萬葉集の鑑賞　島木赤彦（萬葉集の鑑賞及び其批評）

第十九　萬葉集

（※短歌二一首〈反歌を含む〉、長歌四首。中大兄・柿本人麻呂・山上憶良・高市黒人・有間皇子・柿本人麻呂・小野老・山上憶良・山部赤人・聖武天皇・人麻呂歌集・人麻呂歌集・山部赤人・橘諸兄・大伴家持・大伴家持・大伴家持・舒明天皇・中皇命〈二首〉・柿本人麻呂〈三首〉・山上憶良〈二首〉）

第二十　古事記　太安萬侶

一　天地初発　二　天の岩戸　三　八咫烏　四　伊吹おろし

第二十一　大祓詞　（延喜式）

第二十二　日本精神　野村八良（上代文学に現れた日本精神）

（※図については未確認）

（昭和九年（一九三四）印刷『国語教程』）

巻一（未調査）

巻二＊

（昭和十一年（一九三六）印刷『国語教程』）

巻一（未調査）

巻二＊

『昭和十二年印刷 国語教程』

巻一（一九三七年十二月）

第一　国語と国民的自覚　藤村作（国語教育論）

第二　明治天皇御製

（※短歌一八首。「日本武尊」「軍旗」「図」「折にふれて」「凱旋の時」〈二首〉「心」「学生」「田春雨」「夏山水」「田家竹」「をりにふれて」「細径」「をりにふれて」「柱」「をりにふれて」「親」「古典」）

第三　読書と時　荒木寅三郎（勧学語）

第四　日本民族の同化力　深作安文（倫理と国民道徳）

第五　陣中日記　正岡子規（子規全集）

第六　緋縅の鎧

（※短歌一七首。落合直文・佐佐木信綱・正岡子規・尾上柴舟・伊藤左千夫・長塚節・斎藤茂吉・釈迢空・島木赤彦・石川啄木・木下利玄・山縣有朋・三条実美・佐佐木弘綱・森鷗外・芳賀矢一・東郷平八郎）

第七　乃木大将を弔ふ　大町桂月

第八　石田治作　森鷗外（鷗外全集第六巻、うた日記）

第九　吉田松陰と国体論　徳富蘇峰（吉田松陰）

第十　反省　幸田露伴（洗心録）

第十一　初日影

（※俳句二一句。内藤鳴雪・正岡子規・与謝蕪村・松尾芭蕉・西山宗因・大野洒竹・夏目漱石・与謝蕪村・高井几董・服部嵐雪・松尾芭蕉・河東碧梧桐・巌谷小波・正岡子規・小林一茶・榎本其角・沼波瓊音・内藤鳴雪・炭太祇・向井去来・松尾芭蕉）

第十二　武芸師範の教訓　瀧沢解（朝夷巡島記巻二）
第十三　勝負の理　井沢長秀（武士訓）
第十四　江戸時代の和歌
（※短歌一五首。孝明天皇・僧契沖・荷田春満・賀茂真淵・村田春海・本居宣長・小沢蘆庵・香川景樹・木下幸文・良寛・橘曙覧・大隈言道・藤田東湖・吉田松陰・井伊直弼）
第十五　一の大事　吉田兼好（徒然草）
第十六　月草の花　（増鏡）
第十七　近古和歌選
一　山家和歌集（※六首）　二　金槐和歌集（※六首）
三　新葉和歌集（※七首。後醍醐天皇（二首）・長慶天皇・宗良親王・尊良親王・藤原師資・北畠親房）
第十八　太平記
一　千剣破城軍の事　二　新田義貞挙兵の事　三　先帝崩御の事
第十九　範頼へ　源頼朝（東鑑）
第二十　宇治川の戦　（源平盛衰記）
第二十一　平家物語
一　禿童の事　二　御輿振の事　三　競が事　四　太宰府落の事
第二十二　保元物語
一　白河殿夜撃の事　二　白河殿攻落す事　三　義朝幼少の弟悉く失はるゝ事
第二十三　平治物語
一　待賢門の軍　二　頼朝遠流に宥めらるゝ事
第二十四　大鏡
一　当代　二　藤原道長

官位相当表・平安京図・（図）第一～第十二（※皇居図・大内裏図・寝殿造・衣服・武具）

巻二（一九三七年八月）

第一　朝見御儀勅語
第二　日本民族の同化力　深作安文（倫理と国民道徳）
第三　日蓮論の一節　高山樗牛
第四　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峰文選）
第五　金華山より太平洋を望みて　土井晩翠（晩翠詩抄）
第六　軍人道徳の淵源と丈夫道　亘理章三郎（軍人勅諭の御下賜と其史的研究）
第七　鎌倉武士の質素と教養　河野省三（日本精神発達史）
第八　長閑
（※俳句二八句。夏目漱石・大野洒竹・河東碧梧桐・高浜虚子・内藤鳴雪・正岡子規・小林一茶・大島蓼太・与謝蕪村・炭太祇・凡兆・上島鬼貫・杉山杉風・各務支考・池西言水・広瀬惟然坊・服部嵐雪（ママ）・榎本其角・向井去来・内藤丈草・越智越人・松尾芭蕉・北村季吟・松永貞徳・井原西鶴・西山宗因・山崎宗鑑・荒木田守武）
第九　甲子吟行　松尾芭蕉（芭蕉翁文集）
第十　九仙山　近松門左衛門（国姓爺合戦）

第十一　八島（※謡曲）
第十二　長光（※狂言）　（狂言記）
第十三　勅撰集　その一　（新古今和歌集）
（※一六首。式子内親王・藤原秀能・後徳大寺左大臣・大僧正行慶・能因法師・二条院讃岐・寂蓮法師・源三位頼政・前大納言忠良・西行法師・藤原定家朝臣・摂政太政大臣・藤原雅経・藤原家隆朝臣・前大僧正慈円・鴨長明）
第十四　神皇正統記　日月の光　北畠親房
第十五　勅撰集　その二　（古今和歌集）
（※一五首。紀貫之・読人しらず・僧正遍照・素性法師・清原深養父・読人しらず・読人しらず・坂上是則・春道列樹・読人知らず・読人知らず・在原業平・読人しらず・読人知らず・「ひたちうた」）
第十六　急ぐ事ある折　（枕草子）
第十七　惟喬の皇子　（伊勢物語）
第十八　萬葉集の鑑賞　島木赤彦（萬葉集の鑑賞及び其批評）
第十九　萬葉集（※『昭和八年印刷国語教程』と同じ歌）
第二十　古事記　太安萬侶
一　天地初発（アメツチハジメ）　二　天の岩戸　三　八咫烏　四　伊吹おろし
第二十一　六月晦大祓　（延喜式）
第二十二　日本精神　野村八良（上代文学に現れた日本精神）
官位相当表・（図）第一～第十二（※皇居図・大内裏図・寝殿造・衣服・武具）

『昭和十四年印刷 国語仮教程　全』（一九三九年十二月）
第一　朝見御儀勅語
第二　明治天皇御製
第三　神皇正統記
一　神国　二　神器　三　政道　四　臣道
第四　神皇正統記論　山田孝雄（神皇正統記述義）
第五　陣中日記　正岡子規
第六　和歌　其の一（※江戸時代の和歌。賀茂真淵など）
第七　第三軍戦況復命書　乃木希典
第八　勝負の理　井沢長秀（武士訓）
第九　石田治作　森鷗外（うた日記）
第十　乃木大将を弔ふ　大町桂月
第十一　俳句（※山崎宗鑑・虚子ら）
第十二　露国ニ対スル宣戦ノ詔勅
第十三　月草の花　（増鏡）
第十四　安宅（※謡曲）
第十五　松下村塾　徳富蘇峰（吉田松陰）
第十六　太平記
一　湊川の戦　二　金崎城落つる事　三　先帝崩御の事
第十七　範頼へ　源頼朝（東鑑）

第十八　聯合艦隊解散告別ノ辞　東郷平八郎
第十九　平家物語
一　競が事　二　逆櫓の事　三　嗣信最後の事
第二十　和歌　其の二
一　古今和歌集（※八首）　二　新古今和歌集（※八首）
三　金槐和歌集（※六首）　四　新葉和歌集（※五首）
第二十一　日本国民の団結心　藤岡作太郎（国文学史講話）
第二十二　萬葉集
（※短歌二〇首〈反歌を含む〉、長歌七首。舒明天皇・倭大后・元明天皇・聖武天皇〈二首〉・春日王・柿本人麻呂・柿本人麻呂・柿本人麻呂〈二首〉・山部赤人・山部赤人〈二首〉・高橋虫麻呂〈二首〉・出典不明・出典不明・笠金村・海犬養岡麻呂・多治比鷹主・大田部荒耳・大伴家持〈二首〉・大伴家持〈四首〉）
第二十三　古事記　太安萬侶
一　天地初発　二　天の岩戸　三　八咫烏　四　伊吹おろし
第二十四　金華山より太平洋を望みて　土井晩翠（晩翠詩抄）
第二十五　大祓詞　（延喜式祝詞）
第二十六　文武天皇詔　（続日本紀）
第二十七　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峰文選）

【＊記録を欠くが昭和十六年（一九四一）改訂】

『昭和十六年印刷 国語教程』

巻一 ❖（一九四一年）

現代一
第一　朝見御儀勅語　藤村作（国語教育論）
第二　国語と国民的自覚　明治天皇御製（明治天皇御集）
第三　陣中日記　正岡子規（子規全集）
第四　乃木大将を弔ふ　大町桂月（桂月全集）
第五　森鷗外（うた日記）
乃木将軍
第六　臣節　（国体の本義）
第七　天壌無窮の精神　山田孝雄（肇国の思想）
江戸時代
第八　玉勝間　本居宣長
一　漢意を清く離れて　二　儒者に皇国の事を問ふには
三　漢国の書をも　四　近き世学問の道開けて　五　道にかなはずとて　六　須賀直見がいひしは　七　大方世の常に異なる新しき説を起す時には　八　おのれいときなかりしほどより　九　宣長三十あまりなりしほど
一〇　宣長県居の大人にあひ奉りしは　一一　おのれ古典を説くに　一二　われに従ひて物学ばむともがらも
一三　世の物識り人の　一四　同じ人の説の　一五　物学ぶともがら物識り人にあひて　一六　よろづよりも手は　一七　昔は皇国の学とてことにすることはなくて
一八　神の道は

第九　武訓
一　葉隠　宮本武蔵
二　五輪書　井沢長秀
三　武士訓　森鷗外（うた日記）
石田治作
第十　和歌（※江戸時代の和歌）
第十一　甲子吟行　松尾芭蕉（芭蕉翁文集）
芭蕉　小宮豊隆（芭蕉の研究）
第十二　俳句（※山崎宗鑑・小林一茶ら）　幸田露伴（ひさご猿蓑抄）
猿蓑抄
第十三　候文　宇都木（ママ）静区
一　父へ　山鹿素行
二　辞世の一句　山鹿素行
武教小学
現代二
第十四　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峰文集）
第十五　和歌
戦線短歌（※山縣有朋・渡辺直己ら）
第十六　反省　幸田露伴（洗心録）
第十七　日本の風土と国民的性格　和辻哲郎（風土）
第十八　金華山より太平洋を望みて　土井晩翠（晩翠詩抄）
第十九　至誠　小西重直（天地の大道と親心）
第二十　達識　田辺元（哲学と科学の間）

吉野時代　北畠親房
第二十一　神皇正統記
一　神国　二　神器　三　政道　四　臣道
第二十二　和歌（※後醍醐天皇・津守国夏ら）　武田祐吉（国文学の研究、歌道篇）
新葉集の風格
第二十三　八島（謡曲）（観世流謡本）
能と日本的味　野口米次郎（能楽の鑑賞）
靱猿（狂言）（新撰狂言集）
第二十四　太平記
一　後醍醐天皇武臣を亡ぼすべき御企の事　二　楠天王寺に出張りの事　三　人見本間抜懸の事　四　吉野城軍の事　五　義貞挙兵の事　六　鎌倉中合戦の事　七　正成兄弟節に死ぬる事　八　先帝崩御の事

巻二＊

巻一註釈第一分冊（未調査）

【昭和十七年（一九四二）、『国漢文教程』を新たに編纂】

『昭和十七年印刷 **国漢文教程 甲 陸軍予科士官学校用**』

第一巻 ❖（一九四二年四月一日発行）

軍人勅諭

第一　朝見御儀勅語　（昭和元年十二月二十八日午前十時三十分、践祚後朝見御儀ヲ

行ハセラレタル際、下シ賜ヒシ勅語）

第二　みよのすたが（御製抄）

明治天皇御製　大正天皇御製　御製

第三　吾等の国語観の反省　橘純一

第四　至誠　小西重直（天地の大道と親心）

第五　黎明（書牘三篇）

㈠　慶喜の恭順に関し大総督宮に　勝安房守

㈡　廃藩置県に関し木戸孝允に　西郷隆盛

㈢　刺客に遭ひたる後叔母に　岩倉具視（志士書簡）

第六　丈夫道　亘理章三郎（軍人勅諭の御下賜と其史的研究）

第七　皇学意見　長谷川昭道

第八　祖の心（俳句抄）

第九　平壌及び黄海戦勝の結果　陸奥宗光（蹇蹇録）

第十　陣中日記　正岡子規（子規全集）

第十一　日本主義　高山樗牛（樗牛全集）

第十二　満洲軍総司令部を送る　徳富蘇峰（蘇峰文選）

第十三　遺墨（書牘二篇）

㈠　盛京省対陣の状況を報ず　乃木希典

㈡　第二次旅順口閉塞に赴くに臨みて　広瀬武夫（志士書簡）

第十四　政戦両略概論　山縣有朋（日露陸戦新史）

第十五　石田治作　森鷗外（うた日記）

第十六　第三軍戦況復命書　乃木希典

第十七　禅と武士道　鈴木大拙（禅と日本文化）

第十八　興津弥五右衛門の遺書　森鷗外（森鷗外全集、刪修）

第十九　革新に於ける伝統と創造　肥後和男（文化と伝統）

第二十　くはし矛（短歌抄）

第二十一　言語活動　東条操（国語学新論）

第二十二　金華山より太平洋を望みて　土井晩翠（晩翠詩抄）

第二十三　世界新秩序の建設（臣民の道）

第二十四　反省　幸田露伴（洗心録）

第二十五　南京陥落の日に　萩原朔太郎（朝日新聞）

第二十六　江南と日本　新村出（樫）

第二十七　紀元二千六百年ニ際シ賜ハリタル詔書

第二十八　紀元二千六百年奉祝会総裁代理奉祝詞

第二十九　敬語に就て　山田孝雄（敬語の研究）

第三十　臣節（国体の本義）

第三十一　かくて我等成長せり　西村皎三

㈠　かくて我等成長せり

㈡　小鳥（詩集・遺書）

第三十二　日本精神に就て　村岡典嗣（続日本思想史研究）

第三十三　初便（戦線銃後俳句抄）

第三十四　求道　橋田邦彦（空月集）

第三十五　対米・英宣戦布告ニ際シ賜ハリタル詔書

第三十六　大詔を拝して　東條英機

第三十七　彼等を撃つ　高村光太郎
第三十八　北米合衆国の国情如何　高山樗牛（樗牛全集）
第三十九　御稜威（戦線銃後短歌抄）
第四十　日本文学の思想性　久松潜一（日本文学の精神）

第二巻（一九四二年八月二十日発行）

図版二葉（古訓古事記・西本願寺本萬葉集）

第一　古事記

序　一　天地の初発　二　伊都の男建　三　天の岩屋戸　四　高千穂の峯　五　八咫烏　六　伊吹おろし

第二　萬葉集（※短歌一〇三首〈反歌を含む〉、旋頭歌二首、長歌一五首）

巻一（※舒明天皇・中皇命〈二首〉・持統天皇・柿本人麻呂〈二首〉・柿本人麻呂〈五首〉・高市黒人・山上憶良・志貴皇子・高市黒人・元明天皇・御名部皇女）　巻二（※倭大后・日並皇子尊舎人〈五首〉）　巻三（柿本人麻呂・柿本人麻呂・弓削皇子・春日王・長田王・柿本人麻呂〈三首〉・柿本人麻呂・柿本人麻呂・高市黒人・石上卿・柿本人麻呂〈二首〉・山部赤人〈二首〉・小野老・満誓・湯原王）　巻四（※大伴旅人・門部石足・麻田陽春〈二首〉・大伴四綱）　巻五（※山上憶良〈二首〉・山上憶良〈二首〉・山上憶良〈三首〉）　巻六（※笠金村・山部赤人〈二首〉・高橋虫麻呂〈二首〉・聖武天皇〈二首〉・山上憶良・海犬養岡麻呂・聖武天皇・元興寺僧〈旋頭歌〉・市原王）　巻七（※人麻呂歌集・出典不明・人麻呂歌集・人麻呂歌集〈旋頭歌〉）　巻八（※志貴皇子・尾張連・山部赤人・高田女王・志貴皇子・岡本天皇・大伴旅人）　巻九（※人麻呂歌集・人麻呂歌集（槐本）・遣唐使母〈二首〉）　巻十（※人麻呂歌集・出典不明・出典不明・人麻呂歌集）　巻十三（※人麻呂歌集〈二首〉）　巻十四（※四首）　巻十五（※遣新羅使人〈三首〉）　巻十六（※大伴家持〈二首〉）　巻十七（※橘諸兄・大伴家持）　巻十八（※大伴家持〈四首〉）　巻十九（※大伴家持〈二首〉・大伴家持・多治比鷹主・大伴家持・巨勢奈弖麻呂・大伴家持）　巻二十（※丈部人麻呂・丸子多麻呂・丈部稲麻呂・大舎人部千文・今奉部与曾布・大田部荒耳・物部真島・大田部三成・大伴家持〈三首〉・大伴家持）

第三　平家物語

一　殿上闇討　二　御輿振　三　教訓状　四　競（きほふ）　五　紅葉　六　入道死去　七　一門都落　八　逆櫓　九　嗣信最期　十　大原入

第四　太平記

一　後醍醐天皇御治世の事　二　備後三郎高徳の事　三　千剣破城軍の事　四　義貞挙兵の事　五　菊池武時戦死の事　六　三井寺合戦の事　七　正成兄弟討死の事　八　先帝崩御の事　九　住吉合戦の事

第五　不動智　沢庵
第六　葉隠　山本常朝口述・田代陣基筆録
第七　武士訓　井沢長秀

第八　うひ山ふみ　本居宣長

第九　書牘

一　母に　大高源吾

二　山寺常山三村晴山に　佐久間啓

第十　和歌

（※九二首。後鳥羽天皇〈二首〉・亀山天皇〈二首〉・後醍醐天皇〈三首〉・後村上天皇〈二首〉・長慶天皇〈二首〉・後柏原天皇・後水尾天皇・霊元天皇・桃園天皇・孝明天皇〈二首〉・尊良親王〈三首〉・宗良親王〈三首〉・北畠親房〈三首〉・源実朝〈三首〉・菊池武時・太田道灌・上杉謙信・蒲生氏郷・豊臣秀吉〈二首〉・武田信玄・伊達政宗・細川幽斎・徳川光圀・下河辺長流・阿闍梨契沖〈二首〉・戸田茂睡・荷田春満〈二首〉・賀茂真淵〈二首〉・田安宗武・谷川士清・富士谷成章・楫取魚彦・高山正之・本居宣長〈二首〉・荒木田久老・小沢蘆庵〈二首〉・村田春海・木下幸文・良寛・平田篤胤〈二首〉・香川景樹〈二首〉・伴信友・橘守部・加納諸平〈二首〉・藤田東湖〈二首〉・二宮尊徳・鹿持雅澄・吉田矩方〈二首〉・徳川斉昭・佐久良東雄〈二首〉・吉村重郷母・松本奎堂・鈴木重胤・平野国臣〈二首〉・伴林光平・真木保臣・佐久間象山〈二首〉・平賀元義〈二首〉・井手曙覧・大隈言道・大国隆正・久坂玄瑞）

第十一　俳句

（※八二句。山崎宗鑑〈二句〉・荒木田守武〈二句〉・松永貞徳〈二句〉・北村季吟〈二句〉・西山宗因〈二句〉・井原西鶴〈二句〉・池西言水〈二句〉・上島鬼貫〈五句〉・松尾芭蕉〈二〇句〉・榎本其角〈二句〉・服部嵐雪〈二句〉・内藤丈草〈二句〉・向井去来〈二句〉・森川許六〈二句〉・各務支考〈二句〉・広瀬惟然〈二句〉・野沢凡兆〈二句〉・炭太祇〈三句〉・与謝蕪村〈一三句〉・大島蓼太〈二句〉・高井几董〈二句〉・小林一茶〈七句〉）

【昭和十八年（一九四三）年三月修正印刷】

『昭和十八年印刷 国漢文教程甲 陸軍予科士官学校用』

現代文篇（未調査）

古文篇 ❖（一九四三年四月一日発行）（※『昭和十七年印刷 国漢文教程 甲 陸軍予科士官学校用』第二巻と同じ内容）

【昭和十九年（一九四四）二月修正印刷】

『昭和十九年印刷 国漢文教程甲 陸軍予科士官学校用』

現代文篇（未調査）

古文篇（一九四四年二月十五日発行）（※『昭和十七年印刷 国漢文教程 甲 陸軍予科士官学校用』第二巻と同じ内容）

（こまつ・やすひこ／青山学院大学教授）